

## 2025年度 学位記・修了証書授与式 式辞

本日、学士、修士、博士の学位記を授与された皆さん、並びに修了証書を授与された皆さん、皆さんのこれまでの努力の結果として、今日の授与式を迎えられたことを、東京理科大学を代表して心からお祝い申し上げます。これまでの学生生活を思い起こすと、湧き上がる喜びもひとしおではないかと思えます。

また、勉学に励む学生を支えてこられたご家族の方々をはじめ、心温かいご支援ご協力を賜りました多くの方々に、心より敬意を表するとともに、厚く御礼申し上げます。学生の皆さんは、今、自信を胸に抱いて、将来につながる一つの到達点に立っています。是非とも、学生のその雄姿を目に焼きつけ、これまでの努力に心を寄せて、これからの成長を温かく見守っていただければと思います。

今日、ここに集う学生の皆さんのこれまでの学生生活を振り返ってみると、二つの大きな出来事が思い浮かびます。一つは、新型コロナウイルスの世界的大流行、パンデミックです。

2020年の年明けから始まった新型コロナウイルスの流行は、皆さんの大学生活にも大きな影響を及ぼしたのではないかと思います。東京理科大学でも、以前と同様の体制に戻り始めたのは2023年度からでした。人類が近年あまり経験したことがなかったパンデミックに対して、ワクチンの開発や治療技術はもちろんのこと、社会生活の多くの場面で新たな対策が必要となりました。科学技術も多様な局面でその力が問われ、様々な形で足跡を残しました。安心できる社会の実現に向けて多くの研究者が努力を惜しまなかったと思います。

この状況の中で、大学教育として対応が必要だったのが、遠隔授業でした。現在はほとんどが対面授業になりましたが、皆さんも、一時期、遠隔授業中心の勉学を余儀なくされたと思います。皆さんはもちろんのこと、大学にとっても、今まで経験がなかった状況を受け入れざるを得なくなりました。

遠隔授業を進める中で、リモート会議の品質の飛躍的向上は目を見張るものがありました。リモート会議は、徐々に活用場面が広がるとともに、社会的にも一定のコンセンサスが得られるようになりました。その意味でリモート会議は人間のコミュニケーションを支える一つの共通手段として、根付いたと思います。この構造は、パンデミックに端を発しているとはいえ、検索ツールやSNSなどとともに、人類が内在的に持ち合わせている社会知能が、これらの技術を許容し、情報基盤として根付かせ、イノベーションを起こしたと考えられます。

この先、完全な低遅延性が実現され、触覚情報や嗅覚情報が伝えられるようになれば、さらなる飛躍があるかもしれません。その時にはまた、その活用方法を社会が持つある種の知的許容力、すなわち社会受容性により受け入れの可否が決まるのだと思います。

もう一つの大きな科学的な出来事は、生成AIの進歩だったと思います。生成AIを使った最初の対話型AIサービスが始まったのは、2022年の年末でした。たった3年ちょっと前のことです。その後、生成AIは急速に進歩し、多くの社会変革をもたらし、今後も大きな影響を与え続けると予測されていることは皆さんも目の当たりにしていることと思います。

生成AIは学習型情報処理を基盤として、与えられたデータをパラメータ学習し、ある種の最適化問題を解くアルゴリズムです。その出力は、所要の目的に対して、最適解あるいは準最適解を提示するものです。その活用に対しては、社会的な価値を判断することはもちろんのこと、活用の範囲や活用方法についても、まだ様々な議論が続いていて、社会のコンセンサスが完全に得られているとは言い難い状況です。この状況から抜け出すためには、生成AIの処理構造をよく理解した応用展開ならびに社会が潜在的に持っている知能を引き出す力、すなわち能動的な社会受容性の獲得がキーになります。

東京理科大学でも、生成AIに対して、どのように対応すべきかは、難しい判断となりました。結果として、教員と学生に対して、知的生産活動の中で、生成AIをどのように活用するか、あるいはどのような場面で使うべきでないかについて、高い倫理観と主体性を持って判断していくことと、この技術の発展に寄与し、この技術の未来を適切な方向に導くことを求めました。マニュアルのような手取り足取りの規則は作りませんでした。このことが、科学技術を標榜する東京理科大学のプライドでもありますし、学生の力を信じるという大学の姿勢でもありました。皆さんには、それに応えていただき、科学技術を牽引する理工系の総合大学として、新しい技術に対する教員と学生の理想的な姿を示せたのではないかと考えています。

皆さんが学生時代に出会ったこれら二つの事象は、科学技術の発展の基本的な構造を示唆していると思います。きっかけはいろいろあるにしても、あるとき、新たなアイデア、理論、実験構想、システム設計などが浮かんだとします。それらは未来の社会変革の種です。しかしながら、その種だけでは社会変革は起こりません。種からいろいろな芽が出て、その中から大きく育つ芽が見つかり、技術的、経済的、社会的にも受け入れられて大きな社会変革につながります。科学技術上の変革、すなわちブレークスルーがあっても、社会変革、すなわちイノベーションが必ず起こるとは限りません。

私が懇意にさせていただいた評論家で稀代の科学コミュニケーターでもある立花隆さんは、ある未来創造のシンポジウムで、まだ見ぬ未来の技術に対して、「どれが本当の芽かは、トライしないとわからない。トライして育てていくことが必要。夢見る力、そうやってほしい、実現したいというパッションを持つ者だけが未来をつくる。」と述べています。グランドデザインを描き、要素技術の開発とシステム化を行い、社会全体に発信し、社会受容性を獲得することで、未来の技術が開花するわけですね。

皆さんは自分自身で自分の種を蒔いてください。種を蒔かなければ芽は出ません。パッションをもって芽を育てなければ、花は咲きません。社会を変えるのは、種や芽ではありません。実った果実が社会に受け入れられた時に社会は変わります。

近年、知識の価値が変わってきました。知識を持っていることは、メリットも多いのですが、得た知識に引きずられるようでは、ハロー効果、あるいはマスキング効果と呼ばれるようなデメリットが生じてしまいます。既存の知識に無防備に引きずられることから脱却し、大きく育つ芽を見極める力と、知識にない技術を育てる勇気、科学的な正義を貫く情熱が必要です。

大学では、できる限り広くカバーできる共通項としての高度な専門知識と学位論文を経験することで一つの分野を深掘りする生き生きとした経験が得られたと思います。ただし、社会で必要となるスキルを大学ですべてカバーすることは不可能です。大学で学んだ知識もそのままの形で社会の役に立つかといわれると、その確率はそれほど高くないと言わざるを得ません。もちろん、社会で役に立つことは多いのですが、すべてではありません。

ただし、東京理科大学で学んだ、種を蒔き、芽を育てるというプロセスは、いろいろと形を変えて活用することが可能です。皆さんは、科学技術の進展に対して、どのような行動をとり、どのような論理を使って、どのように結論を出すかを学びました。知識は時代とともに変わってしまいますが、このプロセスは、時代が変わり、対象が変わっても変わることはありません。自信を持ってください。必ずやってくる未来の変化に対して、皆さんが東京理科大学で学んだものは、科学技術という堅固な基盤の上で、対象を変え、形を変えて大きく花開きます。

皆さんの人生の選択に正解なんてありません。選択という行為だけでは、最適解には到達できません。なぜなら、未来は皆さんが思う通りにはならないからです。ただ、皆さんが選んだ道でベストな人生を送ることはできます。なぜなら、未来の人生は、実績に基づく設計問題だからです。皆さんの未来は選ぶものではなくて、創るものです。自ら選択した道を自らデザインし、情熱をもって努力することで豊かな未来が手に入ります。

今日、皆さんは東京理科大学を卒業して、人生の新たなステージに飛び込むこととなります。東京理科大学で過ごした時間の中で、皆さんは多くの宝物を得たと思います。その宝物を胸に秘めて、飛び込んだ新たなステージで、自分が描いた未来、誰も見たこともない輝かしい未来を自らの手で掴み取ってください。ここに集うすべての皆さんがその輝かしい未来の主人公であることを祈念して、私の式辞と致します。

2026年3月20日  
東京理科大学  
学長 石川 正俊